

アユの全雌生産試験

藤井 久之, 辻村 明夫

抱卵したアユの雌は「子持ちアユ」として人気があり商品価値が高いが、アユ養殖では雌雄の選別を手作業で行っているため生産効率が低い。一般に、全雌魚を大量に生産するには、雌性発生二倍体魚に雄性化ホルモンを投与して性転換雄を作出し、それと通常雌とを交配させる方法が効率的であり、一部の魚種では全雌種苗として実用化されている。そこで、アユについても全雌生産技術を確立するため、平成7年度より性転換雄の作出試験を開始した。試験は現在のところ途中であり、今回はその概略を報告する。

供試魚は平成7年11月に極体放出阻止法により作出した雌性発生二倍体魚で、ふ化後41日目の仔魚（全長14.3mm）を各1,600尾用いた。

使用したホルモンは17- α メチルテストステロン（シグマ社製）で、所定量をエチルアルコールに溶解後、配合飼料に吸着・風乾した。投与ホルモンの濃度は、配合飼料1g当たり1.0, 0.5, 0.1および0.01 μ gの4段階とし、平成7年12月20日から平成8年4月17日までの120日間投与した。

供試魚の飼育は黒色塩化ビニール水槽（500 ℓ ）1槽を用い、同様の水槽を濾過槽とした循環濾過方式で行った。飼育水はアレンの希釈人工海水（比重1.0055）で、1週間に1～2回半量を換水した。ホルモン投与期間中の水温は14.7～20.4 $^{\circ}$ Cであった。

ホルモン投与終了後の尾数は全体では421～750尾であり、全長と体重は59.7～72.2mm, 1.8～2.6gであった。供試魚は平成8年秋に雄性化を判定するとともに、それを用いて全雌魚の生産を行う予定である。